

(^_^)v 趣味に生きる(第49回) ~*~☂~*~☂

ブルースを浴びて暮らしたい

上 田 一 仁

(市立芦屋病院 臨床検査科)



写真1 今回のLIVEのフライヤー

「何で、これCHRISTMASの「CH」が切れてるん？」

「バンマスがな、俺らクリスマスソング♪は演れへんやん。って言いながら、ニカッ!と笑いよってん」

「そら、恐いなあ…汗」

「おお…B型のわがままのくせに、細かいとこ

あるからなあ」

「いや、そのきめ細やかさがバンマスのええとこやん！」

じゃ～まねから送られてきた今年のLIVEのフライヤーを見ながら、たわいもない会話でビールを飲んでた。今年は12月23日の金曜日。そう「ラバーズたちの3連休」初日なので来てくれる方々は淋しい人たちになる。

メリークリスマス!!



写真2 LIVEハウス入口

初めての重い鉄の扉を、グイッと力を込めて開けると、薄い紫煙の中に浮かぶ、これも紫色系の照明に映えるステージと楽器たちが私たちが待っていた。くわえていた煙草を入り口近くのテーブルの灰皿でもみ消し、足早にステージに上り、備えてあったフェンダーのジャズベを手にとった。初めての箱の扉が重かったのは気のせいではなかった。せめて最期の時はシャッフルの跳ねた感じで終えたいと私は考えていた。親指で軽いフレーズを叩いてみた。とは言えこのバンドはブルースバンドである。スラップでベンベン演るよりも、ツーフィンガーで手早く飛び跳ねることが要求される。年のせい、おふざけの時は楽なスラップで何気にやり過ごすことが多い。そんな時、たまにバンマスから「こらっ！」と怒られる。

バンド名は DSBB。ど素人ブルースバンド = Do-Shiro-to Blues Band の略である。どこかで聞いたことのある名前だ。確かにバンマス以外はブルース演奏に関して極めたメンバーはいない。いわゆるブルースバンドとしてはバンマスのワンマンバンドである。が、バンマスが決める選曲や構成に関して不満を持つメンバーはおらず、変に仲のいいバンドである。そして、いつもバンマスに言われることがある。「このバンド、やろう！って言いだしたんはお前やからな！」と。重いベースを担がず、手ぶらで「リハビリ (DSBB ではスタジオ練習のことをこう呼んでいる)」にやって来る、私がケツを割りそうに見えたのだろうか？

そうそう、われわれメンバーにはそれぞれミドルネームがある。ちなみにバンマスは、ちゃんとしたオッサンであるにも関わらず、「ラブリー」と呼ばれる。

数年間のリハビリののち初めて LIVE ♪ を開催したのが 2013 年の冬だった。スナイパーの娘がデザイン関係の仕事をしているとの事で、写真撮影からフライヤー、チケット作成までこなしてくれた。本町辺りにある小さな箱だったが、マスターが医療系のお仕事をされていたとのことで、親しみやすく格安で箱を提供してく



2013.12.21 (sat)
14:30 Open / 15:00 Start ¥2,000 (1ドリンク制)

LIVESPOT TENSION

【地下鉄堺筋線「堺筋本町駅」から徒歩5分】

12番出口を出て、堺筋を北へ向かい、3つ目の信号を右折、50m先右側の地下1階。

【地下鉄堺筋線「北浜駅」から徒歩6分】

5番出口を出て、堺筋を南へ向かい、4つ目の信号を左折、50m先右側の地下1階。

【住所】〒541-0064
大阪市中央区瓦町1-4-6西興産ビルB1
【TEL】06-6209-0310
【URL】http://livespot-tension.com

写真3 初LIVEのフライヤー

れた。が、そこは初LIVE♪！緊張感からか悲惨な結果で、DSBBならぬ DDDDDDDDSBB の称号を得ることになった(泣)。

スナイパーはバスのペダルの位置を軸に椅子とハイハットを少し手前に動かした。背の低いプリティは、CORGのキーボードを前に、椅子をクルクルと回していた。ラブリーとプリティの身長はほぼ同じであった。弦楽器隊は自らが担いできたギターをアンプにつないだ。結局、今朝も早くからリハビリを行ってきたので改めて念入りなチューニングをする必要もなく、ラブリーがストラップを肩にかけギターの抱き位置を一度ゆずって確定したところで、G7からスライドしてきたA7の音がグイ〜んと鳴り響いた。スイーティーが的確な裏ノリのバックキングをスナイパーのテンポに合わせていた。キーボードからブルーノートが紡がれ、そこにおもむろに私の低音が乗ることでステージ上が一体化した。ヒゲ面のクリスがバーボンのグラス



写真4 2016年12月 演奏風景

をヒョイと持ち上げ、「イエィ！」と小さく微笑んだ。

DSBBがこの箱で演るのは初めてだった。これまで少し狭めの箱で皆が寄り添って演っていたのに比べ、ここは各自のプライバシーが守られていて、バンドメンバーと客の間に絶妙の距離がとられていた。ベースアンプが立ち位置から少し離れていて、自分の音が聴き取りにくかったのだが、元々、自信のある演奏は出来ないので控えめ…むしろ自己モニター出来ないレベルの方が気が楽であった。そんな軽い音合わせの後、「ほな、いこか！」に続くワ〜ン♪ツ〜♪スリ〜♪フォ〜♪

ラブリーのゆっくりとしたカウントのあとオルガンのCの音が響き渡った。「A whiter shade of pale」静かな曲だがブルースミュージシャンが好んで演奏する定番曲である。サビ前の3連符でいつももたつくのだが本番に強いわれわれはええ感じでそこを乗り切っていた。

「シェイドオオ〜ペール♪」

クレイジーのヴォーカルの名残を残したままE7をラブリーが下からすくい上げた。

「I'll play the blues for you」は恐らく全員が眼をつぶっても演れる楽曲で、途中のMCタイムも含めて、LIVE前半を盛り上げる定番曲であった。振り返ると、Amブルースを少し不安げに奏でるプリティと目が合った。その可愛い瞳

がテレを伴ってニコッと天使の微笑みになった。恐らく、クラシックを弾いているときはドヤ顔で鍵盤を叩いているはずのプリティは、このバンドではいつも控えめにブルーノートを鳴らしている。本番にも関わらず、ラブリーが「ガ〜ン！ともっと強く！」とはっぱをかけるいつもの光景に思わず笑みがこぼれた。さっきも少し触れたが、ラブリーは身長152cmと男子としては小柄な男である。しかし、内に秘めるカリスマ性を備えた男で、B型特有のわがままも周りの人間は許してしまえた。DSBBはラブリー以外ズブの素人で、宴会の余興で弾き語りを披露できる程度の技量しか持たない面々であった。ラブリーが存在しないとバンドとして成り立たないのは至極当然であった。そんなバンドに後日、合流してくれたプリティは、小さなころからクラシックを演っており、楽器演奏に関しては、このメンバーの中ではラブリーに次ぐ腕前であった。いつどのようにDSBBに合流してくれたのか記憶は定かではないが、少なくとも私はリハビリをサボらなくなった。

15年ほど前だろうか、ロンドン郊外にあるRonnie Scott'sというLIVEハウスに行った。その夜……といっても夏のロンドンは21時でもまだ明るいのだが……ART PORTERの演奏を堪能した。アルトサクソとソプラノサクソを同時にノリノリで吹きこなす超絶技に私は度

THIS MAGAZINE IS FREE - PLEASE TAKE ONE... and some for your friends if you wish Number100

JAZZ AT RONNIE SCOTT'S

the house magazine of ronnie scott's club
published bi-monthly
47 FRIETH STREET, LONDON W1V 6ET
The club is open Monday to Saturday, 8.30 pm to 3.00 a.m.
Telephone: 0171 439 9747 Fax: 0171 437 5361
Internet address: <http://jazz.roland.co.uk/ronnie-scott/>

100th ISSUE

JULY

Monday 1st - Saturday 6th
YVONNE JACKSON
plus
DICK PEARCE QJ

Monday 5th - Saturday 20th
ART PORTER SEXTET
plus
TONY O'MALLEY

Monday 22nd Saturday 27th
RAY GASKINS
and the Soul Crusade
plus
ANITA CARMICHAEL and SANATRONX

Monday 29th - Saturday 11th August
BETTY CARTER
plus
TIM WHITEHEAD QJ

2nd week
TIM GARLAND QJ

1996



ART PORTER



BETTY CARTER



LOS VAN VAN

100th ISSUE

AUGUST

Monday 12th - Saturday 17th
JOSE NETO
plus
BOB KINDRED QJ

Monday 19th - Saturday 26th
September
SALSA FESTIVAL
with
JUAN FORMELL'S LOS VAN VAN
plus
1st week
MIKE CARR TRIO
2nd week
STEVE MELLING TRIO
3rd week
COLIN PURBROOK TRIO
(Programme subject to alteration)

FUTURE ATTRACTIONS
CEDAR WALTON
ELVIN JONES JAZZ MACHINE
JAMES MOODY

(FOR RESERVATIONS RING 0171 439 9747)
Photograph of Betty Carter by David Hudson

RONNIE SCOTT'S is a night club set in the heart of Soho, providing jazz music of international standard, but informally in the keyword. The doors open at 8.30 pm. The music starts at 9.30 pm and the club closes at midnight. There are three bars and an extensive à la carte menu. Ring 0171 439 9747 for reservations.

YOU DON'T HAVE TO BE A MEMBER TO VISIT THE CLUB, BUT THE MANY BENEFITS OF JOINING ARE OBTAINED IN THE SENIORITY MEMBERSHIP OFFER INSIDE.

写真5 Ronnie Scott's パンフレット

肝を抜かれた。その日はロンドンのイベント会社に勤めるヒデトがホテルまで迎えに来てくれた。助手席には、コロンとした可愛い日本人女性が座っていた。「こんばんわっ！」という明るい挨拶は、初対面だと思わせないオーラを出していた。ハナという名前がどんびしゃな女の子であった。ハナはとても明るく気の利く女の子で、そんなハナをヒデトも目を細めてみていた。二人の間には絶妙の距離感があって、私は勝手にお似合いだなと考えていた。3人で良質の音楽を楽しんだ後、向かいのコーヒショップに入った。そこそこ混雑していたのだが、ハナに不自然に近づく男がいた。私は痴漢かと、目が合ったその男を睨みつけた。男は一瞬たじろいだような表情をしてハナから離れていったのだが、いざレジの前でお金を払おうとしてハナが財布がない事に気づいた。さっきの男はスリだったのだ。何気に風貌は覚えていたので慌ててコーヒショップを飛び出し捕まえようと試みたが、闇の中、路地の多いロンドン繁

華街ではそれは叶わなかった。中のお金はいいけど、お父さんからプレゼントされたという財布自体を惜しみ落ち込んでいた。可能性は低いが一応警察に届け、近辺のゴミ箱などを捜索したが、結局財布は見つからず、不気味な緊張感がピンと張り詰める深夜の地下駐車場を3人で肩を落として歩いていた。ヒデトがハナを一生懸命に元気づけている姿が眩しかった。後日、中身の抜かれた財布が戻ってきたと連絡があった時、「ヒデトやるやん！」と心の中でガッツポーズをした。

背が高くイケメンのヒデトと小さくて愛くるしいハナはお似合いだった。数年前、北堀江の小さな箱での Berklee College of Music の学生さんによるイベントで出会った時のヒデトは恰幅の良いオッサンになっていた。何気に「ハナは元気してる？」と、当たり前のように結婚したと思っていた私の問いに、気まずそうに紹介された奥様はナイスプロポーションのモデル風なアメリカ人だった。私は奥様がハナではなかったことに少し戸惑いを覚えた。ヒデトの「初恋」のお相手はハナではなかったのだろうか？

そういえば、私の二人の娘が一昨年ロンドンを訪れた時、アピイロードスタジオの中に入ったそうだ。異国から送られてきた写メに私は我が子ながら強い嫉妬を感じた。そんなに簡単に入れる場所ではないことは明白だった。ついこの前、Paul McCartney が来ていたとスタジオ内のエンジニアさんが言っていたそうだ。当時 Beatles が使用したミキサーがまだ現存しており、John Lennon もつま弾いたかもしれないオルガンも片隅に置かれていた。にしても娘たちはどんな手口を使いやがったのだろうか？……っと、少し口調が荒くなってしまった(汗)。

いつもなら Fm で終わろうという楽曲なのに今日はエンディングは F9 で！というラブリーの心には、きっとブルースに込められた想い以上にやるせない気持ちが溢れていたのだろう。ラブリーの紡ぐフレーズには時々「初恋」が隠されている。恋多き男だ。



写真6 Abbey Road Studios



写真7 Beatles が録音に使用したミキサー

「右から数え 三番目の 君は光の中だね♪」
「揃いのベスト 私だけイニシャル 変えなきゃいけない 梅雨が明けるまでに♪」
「聞こえてくるのは 古い歌ばかり♪」
「季節外れ 肌寒い雨の日……カーディガンじゃ薄すぎたかしらと 雨の音と独り言♪」
恐らく出会って一番初めに聴かせてもらった曲「a song」。それはそれは素敵で曲だった。
「a song ときめくことが恐かった 傷つくのはいつも僕だから♪」
そんなメロディと歌詞を思い返しながら、私自身の像を重ね……少し開き直れる自分を大人だと感じた。9thの音が涼やかな緊張感をもたらす。紫煙に包まれたこの箱の中でなければ、そのテンションは人の心を爽やかにさせただろう。

ラブリーは酔うといつも「ブルースは挽歌つちゅう意味やねん。その昔はそんな場面で悲しみや慈しむ想いを込めて歌われとってん！」と熱く語る。キューティーは何度も聞かされることでありながら、ラブリーの目を見て「へえ～、そうなん！」と共感の姿勢を見せる。臨床心理士という職業柄がそうさせているのだろう。もしくは、本当に忘れて何度も驚いているのか、この年になると区別がつかなくなる。

スナイパーは和太鼓を習っていたりもしたが、基本的に激しく叩くのが好きだった。それこそメタル系でも、ツインバスターでダダダダッ！ダダダダッ！と演りたい派だった。ある時、私が、「掴みに派手な……せやなあ、ディーブパーブルでも演れへんか？」とラブリーに提案したことがあった。その時、スナイパーはグイッと身を乗り出して「ええやん！」と笑った。結局、演ることはなかったが、スナイパーのブラシワークは格段に上達していた。

If you ever ～♪キューティーとクレイジーの声の交わりは心を和ませてくれる。決してコミックバンドではないが、弄られキャラのクレイジーと、このバンドの母的な立ち位置のキューティーは絶妙のコラボを見せてくれる。そこへ新規加入の若いビューティーの声絡むと独特の緊張感が発生して聴くものを虜にする。カチャン！グラスと乾きものの皿が触れ合い醸し出された音もハイハットの間隙を埋める絶妙の



写真8 DSBB2015夏LIVE

タイミングであった。ここでは聴衆もミュージシャンだ。

クレイジーには学生当時、色白のシュッとした綺麗タイプの彼女がいた。聞けば高校の同級生で同じ剣道部だったそうだ。高校卒業後、同じ専門学校を受験したが、彼女が合格出来ず1年後再チャレンジして先輩・後輩の仲になった。後日談ではあるが、勉強好きのクレイジーは1年長く学校に居る事を余儀なくされ、囚らずも二人は同級生となった。そんなクレイジーは非常に優しい男で誰からも愛されていた。しかし、学生当時から頭髪が少し後退気味で、怪しげなフクロウのセーターを好んで着用していたせいもあって、バリバリモテル要素は持っていなかった。にもかかわらず、追いかけて来る一途で清楚な彼女の存在はラブリーの心を揺らし、「みんな不幸になればいい」という妬みSONGを書き上げる原動力となった。ほぼ月1回、リハビリ後の打ち上げでのいじりネタとして定番であった。

クールなスイーティーはあまり感情を表に出すことはなかった。それは演奏中でもそうだった。しかし、冷静なコードワークの中に散りばめられた、ふとしたお洒落なフレーズにドキッとさせられることがしばしばあった。スイーティーが愛する女性も彼と同様クールな印象がある。恐らく打ち明けることはないことを分かっているながら、その頃入り浸っていたクレアンヒルズという喫茶店の日記帳に暗号で想いを綴っていた相手はクールな女性であった。また、ある時は後輩と取り合いになった女性もクールビューティであった。もちろん今の彼のワイフも



写真9 2014年冬LIVEフライヤー

究極のクールビューティである。

DSBBメンバーの中で一番真面目なスナイパーはその彫りの深い顔立ちもあって学生時代には他学科の女性たちからよく声をかけられていた。が一方で、学校の近辺で飲んでいて帰れなくなった時、よく後輩のマンションを利用させてもらっていたのだが、スナイパーだけその家主の彼女と二人ベッドで寝息を立て、われわれはほぼ毎回床で寝ることになっていた。まあ根本的にモテル男というか、後輩は公然の恋人の一人で誰も文句は言わなかったし、むしろスナイパーのおかげで雨露をしのげることに感謝し



写真 10 終演後のステージ

ていた。そんな浮名を流した彼だが結婚の知らせを聞いた時には正直驚いた。私自身、全く無警戒で……というか彼の女性観に対する認識が間違っていたことが少しショックだった。

そこそこ練習していた「Cherry Pie」がラブリーの一声でセットリストから外された。当日聴きに来てくれた方々に配布するセットリストを作ってくれたじゃ～まねは大橋トリオのファンで、DSBBがこの楽曲を演ることを密かに楽しみにしていた。ラブリーがあと少しで完成しそうだったこの曲を何故外したのか？彼の大人気ない抵抗だったのかもしれない。もちろんラブリーあつてのDSBBだし、全て憶測のことなので、事の真意は不明だ。次回のLIVEまでには完璧に仕上げ、お客さんとして来てくれるはずのじゃ～まねに聴かせたいと思ってもみだが、もしかしたら私自身が大人気なく「演らない」といじけているかもしれないと心の中で苦笑いした。

最後の曲は「Ob-La-Di, Ob-La-Da」♪ タンタカタッタ！軽快な鍵盤の音が鳴り響くと何故だかみんな笑顔になった。いつもなら「もっと強く！」とラブリーの叱咤が飛ぶ場面だがラブリーも微笑んでいた。大盛り上がりの楽曲を終え、

MCの御礼の挨拶の後、三々五々解散となった。懐かしい同級生や元同僚と握手を交わし声をかけ見送ったのだが、誰しも笑顔だったことで少し気持ちが癒された。バンドメンバーと数名の仲間が残り、今日のLIVEについて語り合った。「だんだん、上手なってるなあ！」「バンド名の"D"は抜いたらどうや？」と言ってくれる先輩がいた。ビールが最高に美味かった。

時間は確実にアウトロに向かっていった……。終演後もステージは解放されており、ラブリーのオリジナルである「Last Song」のヴォーカルを取らせてもらった。「Last Songさ もう歌わない 通り過ぎた恋なんか」。

恋に破れたり、仕事で上手くいかなかったり、恋に破れたり、嫌な出来事があったり、恋に破れたり……なんべん「失恋」すんねん！（笑）……した時、ブルースは心を癒してくれる。まだまだヒヨコやけど、そんなブルースを浴びて暮らしたい。とマジックサムのBGMが流れる店内で青いLEDライトを見ながら考えていた。

本愚稿は全てフィクション……私の妄想です！ご登場いただいた皆様に感謝いたします。